
彼女は人を欺くことに快感を見出す

丸今かつぞう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は人を欺くことに快感を見出す

【Nコード】

N2396R

【作者名】

丸今かつぞう

【あらすじ】

この物語は、人類史上最悪の詐欺師女、綾野川英恵と唯一その正体を知っている糸倉優、それに巻き込まれていくかわいそうなその他大勢の姿を描く、一大叙事詩である——嘘である。

史上最悪の性悪女が主人公で大丈夫ですか

「前に一目見た瞬間から好きでした！…っ、俺と、付き合ってください」

少年は頬を赤く染めながら…、こぶしを強く握りしめ…、眼の前にいる少女に勢いよく告白した。

ここはある程度名の知れている名門校、最洲学園。その屋上に二人の男女がいた。春の風が悪戯に二人の間を通り抜けていく。

女子生徒は、短い髪を耳にかけながら、困ったような笑顔でうつむいていた。

「えっと…^{さいご}齊木君？ だったっけ…？」

「はっ、はい！」

「ごめんなさい…。私、あなたのこと、まだ何も知らないし…。いきなりお付き合いとかは…」

「…そっ、そうですね！ いきなり告られても気持ち悪いですよね…！ スミマセン！」

顔を真っ赤にしながら、少年は俯いた。

「そういうわけじゃないのっ」

そんな少年の姿を見て、少女は慌てたように、言う。

「ただ、何も知らないのにいきなり付き合うのは、不自然な気がするの…。…よかったら、お友達から、ってことでいいかな？」

「…！」

齊木は少女の方を見た。手で口を被って俯いている彼女は照れているように見えた。

「もっ、もちろん！ 友達として！ これからよろしくね！ ^{あやのかわ}綾野川さん！」

春。少年にも春がやってきたのだ。二人はその後、互いのメールアドレスを交換し、齊木は屋上から退場していった…。

彼の後ろ姿をポケットに白い携帯をしまいながら少女は観ていた。

彼の姿が見えなくなると、少女はおもむろに携帯を取り出した。
しかし、その形態が出てきたのは先ほどもしまったポケットとは反対
のポケットで、形態は黒色になっている。

携帯を操作し、電話をかける少女。

「…あ？もしもし？今用事終わったから来い。は？場所？屋上だよ。
それぐらい解かれよ。いい？五分以内に来いよ？じゃーな」

プッ

不通音が発せられている携帯を耳から離しながら、糸倉優は窓の
外を見た。それは屋上の方向。

「糸倉、早く教室戻ってパン食おーぜ」

前のほうで彼を待っていた男子が彼に声をかける。

「わりい。用事できた。先に行つて」

糸倉はそう言うのと、廊下を駆け足で進んでいった。

「20：19：18…」

屋上でフェンスに寄りかかっている少女は、携帯の液晶画面を見な
がら、カウントダウンしている。彼女の上には澄み渡る青空。実に
居心地良い風が彼女の頬を撫ぜる。

「17…」

その時、階段の方から、こちらへ駆け上がってくる音が聞こえてき
た。彼女は、そちらへ視線を移す。

ドア思いきり開ける音。

「セーフ…」

菓子パンの入ったビニル袋を片手に持ちながら、糸倉は屋上に到着
した。

「糸倉…」

彼の姿を見つめながら、少女は口を開く。

「アウト」

糸倉は、眼の前に居る少女を数秒見つめ、反論する。

「いや、セーフだ：」

「：お前、この、綾野川英恵あやのかわはなえさまの言うことに文句つけるつもり？」

青年の反論に、気分を害したように、眉間に皺をよせ：数分前からは想像し得ない険しい表情で、綾野川は睨みつけた。

「：お前が俺に電話をしたのは午後十二時二十五分三十一秒：」
怯まず、糸倉は返す。

「俺が到着したのは午後十二時三十分二十五秒：これは俺が到着した際の写真だ」

彼は、少女に向けて携帯の画面を見せる。そこには、屋上に座っている少女が写されていた。撮影日時は確かに、彼が言った時刻が表示されている。

「：ふっ」

それを見た少女が笑う。前髪をよけながら。穏やかな日差しだ。

「ふはははははははははははああああっ！前提を間違っているぞ！

糸倉優っ！」

：何と表現するべきか困る笑い。もし、それを説明するとしたら、

「少女マンガにダメ、絶対」としておこう。

「それはお前が『五分以内に来い』と勘違いしたからではないか！俺様は言った！『三分以内に来い』と、な！」

してやったり、といった厭らしい眼で自分の前に居る青年を見下す。いや、身長自体は彼女の方が低いのだが、彼女の気迫が幻影を見せているのだろう。ちなみに、彼女は女装っ子でないかぎり、正真正銘の女子であるはずだ。

「さあてとっ、罰ゲームは何が良いかなあっ！？糸倉君！『屋上

十字架の刑』！？『下水道ダイブ』！？それとも『宝探しゲーム』
がいいかなあっ！？」

綾野川は、これ以上の醜悪な表情を考えさせない笑みで勢いよく、
糸倉の方へと向かう。

その時、糸倉はポケットから小さい機械を取り出した。

「…？何よ、それ」

出された機械に眉間に皺をよせ見つめながら問う綾野川。

「…ボイスレコーダー。これにお前との会話が入っている」

悠然と、少年が答えた。

「…」

「…」

二人の間に、流れる沈黙。

数秒経つと、「チッ」と、誰かが舌を打つ音が少しだけ響いた。

「で、そいつは言ったわけだ！『いきなり告られても気持ち悪いで
すよねー』って！！気持ち悪いって解ってるなら最初っからすんな
よ！って感じだよなあ！？頭湧いてるって感じ！」

苺ジャムパンを思いっきり頬張りながら、綾野川は騒いでいた。

「でさー、俺様は言ったわけよ！『…よかったら、お友達から、
ってことでいいかな？』って！」

おしとやかな動作を交えながら、喋りまくる。ガンガン喋りまくる。
そんな彼女を、糸倉優はカスタードパンを食べながら黙って眺めて
いた。綾野川のテンションはどんどんヒートアップしてきている。

「そしたらさ、もうそこに一縷の希望を見出しちゃったみたいで
！すごいテンションあがってるのね！！もうっ！すごくそれがさ！
！」

「ゾクゾクして!!」

全てのエネルギーを打ちこむように、彼女は「バンッ」と手を地面にたたきつけた。少女の眼は面白いものを見ているかのように、とても輝いている。

「もう、笑いだしそうで、手で必死に、にやついた口元を隠してー、あ、それ食べないなら、頂戴」

そう言うと、綾野川は糸倉の近くにあったビニル袋に残っていたチョコクリームパンを奪った。

「あ…」

盗られたパンを、少し切なそうに見つめる糸倉。彼の昼食は、三分の二、彼女に奪われた。

「あー、やっぱいいねえ、こう、自分を偽ってキャラ造りするってのは!」

「相手が勘違いして接してくる時を見るのがたまなくゾクゾクする!! くはあっ!」

綾野川はパッケージ袋を破りながら言う。そして、啜えた。

「…結婚詐欺師にだけはなるなよ」

パンを奪われた糸倉は、しょうがなく、残り少ない紙パックのオレンジジュースを吸う。

「やだなあ! 糸倉くん!」

無邪気な笑顔を装いつつ人差し指を口元にあて、少女は答える。

「『合法的詐欺』が、私のモットーだからっ」

「…きも」

これが昼休みに糸倉が発した最後の一言となった。それから、続くように、「バキッ」という音が校内に響き渡った。

「英恵ー」

綾野川が教室に入ると、名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「はるか」

肩までの長さをもつウェーブがかった明るい髪色の女子生徒が綾野川の方へと近付いてくる。なにやらにやついている様子。

「何処行つてたの？」

「え？屋上に…昼食に…」

「それだけじゃないでしょ…」

はるか、瞼を細めながら、口角を上げて言った。

「え…」

瞬間、綾野川の身体に緊張が走る。それは、微々たるものであったが。

「…何のこと？」

表情を変えずに綾野川が返す。

「隠しても駄目だよ？…知ってるんだから」

女子生徒は口元を綾野川の耳に近づけながら、囁く。

「B組の生徒に告られたんでしょ！英恵！」

「…うん。やっぱりはるかには、ばれてたかあ」

苦笑いの表情を浮かべながら綾野川が反応する。

「学校一の情報屋なめんなよっ！で、どうなの？OKしたの！？」

眼を輝かせながら、高いテンションではるかが聞いてくる。

「全然知らない人だったし、友達からってことに…」

「うわー、思わせぶりだなあ、英恵は！」

「そっ、そう？」

ちなみに、騙されそうなかawaiiそうな人たちのために、ネタばれしておく、彼女の反応は嘘である。全て偽り。告白の件のみならず、只前はるかの接近から今に至るまでも、すべて、悪魔のような女、綾野川英恵の予想通り。そして、それを予想した上で、自分の人格を他者に植え込んでいく…これが彼女のやり方だった。

『やっぱり、はるかの話題は告白のことだったな』

『少し、遠慮がちな反応の方が好印象だね』

『思わせぶり！？狙ってんだよね、こっちは！「気がつかないうちに思わせぶりの行動をとっている少し抜けている女生徒」をな！はははははあ！』

教室奥でそんなことを心の奥で思っている彼女の様子を教室前で静観している男がいた。

「あれ？おいっ！優、どうしたその頬！」

「…コンクリートにぶつけた」

糸倉優は普段の五倍くらいにはれ上がった右頬を氷で抑えながら立っていた。

この物語は、人類史上最悪の詐欺師女、綾野川英恵と唯一その正体を知っている糸倉優、それに巻き込まれていくかわいそうなその他大勢の姿を描く、一大叙事詩である——嘘である。

最悪女の敵

キンコンカーンコン。本日の授業終了のお知らせ。国内にはチャイムが鳴らない学校も多々あるとか。余談。

「じゃあねー、英恵」

放課後に入り、騒がしい教室の中で、学生カバンを肩にかけながらはるかが別れを告げる。

「また明日。部活動がんばっ」

遠慮がちに手を振りながら、椅子に座ったまま友人を見送る綾野川。手を振り返すと、はるかは駆け足で教室を去っていった。

クラスメイトが消えたことを確認すると、鞆に手をかけ、自分もさっさと帰ろうと立ち上がる。廊下側一番前の席の利点は、生徒の荒波にもまれずにさっさと廊下に出れるところも挙げられる。

「あ、綾野川さん」

その時、後ろからかわいらしい声が綾野川を呼んだ。

「！」

前の方を見据えたまま、綾野川の眉間に力が僅かに入る。

「何？^{あくたがわ}芥川さん」

綾野川が爽やかな笑顔を造りながらゆっくり振り返ると…そこには声に違わず、小柄でかわいらしい少女が立っていた。背まで伸びる長髪を肩の位置で二つ縛りにしているところも高ポイント。

「これ、楠村先生から渡してくれて頼まれたの。次の風紀の委員会では話し合う議題についてだから目を通しておいでくれって言ってたよ」

「ああ…わざわざ、ありがとう。芥川さん」

渡されたプリントにさらっと目を通すと、再び、目の前にいる小動物を見つめ、清らかそうな笑顔で礼を言った。

よくやるもんだ、といった顔で、綾野側たちの様子を教室の掃除をしながら糸倉が観ていた。

「ふふ、どういたしまして」

ピシッ。

気のせいだろうか。次の瞬間、ラップ音が聞こえた気がした。糸倉は、音の発生源を見つけようと、辺りを見回す。

「…でも、楠村先生もひどいよね。芥川さんに『面倒事』を押しつけて」

笑顔のまま、綾野川が何やら言いだし始めた。

「受け持っている委員会のプリントを『その辺にいる』生徒に『押しつける』なんて…。誰でもできる『簡単』なことなのに。これじゃあ、まるで芥川さん『パシリ』じゃない？『なめられて』いたりしてー…」

所々、強調しながら、芥川相手にまくし立てている。表情は穏やかながら、綾野川の後ろには数々の戦場で戦ってきたなんか凄そうな歴代の戦士たちが見える。そいつらが、今にも芥川を襲いそうな面持ちで睨んでいる。少なくとも、少し離れたところでこれまでをみほうけていた糸倉にはそう見えた。

「…」

じつと、綾野川を見つめる芥川。さあ、この意味不明な攻撃にどう返す。

綾野川も負けずと笑顔でい続けている。

…次の刹那、芥川の口元が緩んだ。ゆっくりと。その数秒とも経たない間の表情の変化を綾野川は観ていた。

「ふふ、楠村先生そんな人じゃないよ」

にこやかに、彼女は言った。

「先生、体調悪そうだったから仕方なかったんだと思う」

ピシッ　ピシッ

またしてもラップ音。糸倉が再び辺りを見回す。

「でも、大事な委員会のプリント、私に信用して渡してくれたんだよね。そういうのってなんか嬉しいね」

ピシッ　ピシッ　ビシンッ

「なんだ！？壁にいきなりひびが入ったぞ！」

綾野川のすぐ近くにいた男子たちが近くにある壁を見て驚く。照れながら笑む芥川が言い終えるのが早い、壁が割れるのが早いか、糸倉には判断し難かった。

「そっそうね…」

綾野川は笑っている。しかし、唇は若干痙攣している。

「私、そろそろ、部活あるから」

「あ…、頑張ってるね…」

少し控えめな声で、芥川を見送ろうとする綾野川。

芥川は綾野川に背を向け、自分の席にあった鞆を肩にかけた。その後、向き直り、

「綾野川さんも次の委員会頑張ってるね！」

…もう、それはち切れんばかりの輝きをまとった笑顔で、綾野川を激励した。

「…っ！」

綾野川に流れる電流。芥川が教室から立ち去った後も、彼女は立ちすくんでいた。表情は見えないが、その様子を見て何かを察知したのか。糸倉が駆けだす。窓の方へと。

ピシッ ピシッ ピシッ

ラップ音発生。

「なんか聞こえない？」

近くにいた女子がそう言うのを、糸倉は聞いた。そして、彼は窓に手をかける。

「優？」

彼の行動を見たクラスメイトが驚いたように声をかける。

ビシンッ ビシンッ ビシンッ

「壁がああっ！？どんだん割れていくぞ…！」

ようやく騒ぎ出す生徒たち。と、同時に糸倉は身を乗り出し――外へと飛んだ。

「…！」

俯いていた綾野川は顔を上げ…そして、眼を見開いた。
次の瞬間、

「うぐわあああっ！！頭が！！割れるように痛い！！」

「うっ腕があ！！関節があ！！」

「吐く！吐くうううううう！気持ちわ…うぼっ●▼■×」

「大丈夫だ…みんな」

自分が脱出してきた二階の教室を見上げながら糸倉が独り言を言う。

「一分の辛抱だ…長くは続かない。それに…」

眼を伏せながらゆっくりと静かに、青年は歩き出す。

「受ける身体的損傷はすぐ回復する程度だ」

絶望的な悲鳴が響く中、風だけが、静かに吹いていた。

「ありえないだろ」

いや、お前の能力の方が人間的にあり得ないよ、いろんな意味で、
と思いながら、糸倉はいきなり家に押しかけて来た眼の前の知り合
いを見ていた。

「…何のこと」

「芥川だよ！芥川文乃！」
あくたがわ・ふみの

「…放課後話してたな」

私服姿の綾野川英恵は偉そうに、親父座りをしながら、憤っていた。
時刻午後七時五分。夕飯時なので、糸倉の部屋で一緒に二人はカレー
ーを食っている。

「…何が気に食わないわけ。普通に良い子じゃん」

ぼそり、とカレーを口に含める前に糸倉が言った。

「…ああんっ！？」

それを聞いた綾野川は物凄い形相で睨んでくる。

「お前、マジで解からないの？『普通に良い子』だからだろうがよっ」

「…は？」

いくら、凄んで言われても解からないものは解からない。

綾野川は、ふうっ、と息を吐きながら頭を振った。

「ったく、馬鹿な知り合いを持つと苦労するな」

そう言うのと、キッと糸倉を睨んだ。

「いいか！？」

「普通、人間というモノは恨み妬みその他もろもろの汚いものが混ざってできているんだ。そして、自分の利害を無意識に計算し、それに最良な行動をとりたいと願っている。親切やらなんちゃら綺麗なものなど、ずえええんぶっ！偽善だ！見返りを求めないものなどどこにいる！？勤労によって金を！奉仕によって愛を求める！そのやましい気持ち裏切られると、人間は『常識がない』などと言って、根拠もへったくれもないくせに、あたかもそれが悪いことのように責め立てる！それが人間というモノな・ん・だっ！」

そこまで言い終えると、一気にしゃべりすぎて疲れたのか、はたまた興奮しているのかは知らないが、綾野川は息切れをしていた。

「…で？」

そんな様子を見無表情で冷静に眺めながら、糸倉が聞き返す。

「…しかし、そんな人間は絶対ボロが出る」

少し落ち着きを取り戻し、綾野川が続けた。

「所詮、自分の行為を力任せに正当化しようとする愚か者たちだ。頭が弱い。…ま、例外としてこの俺様がいるがな」

鼻高々と言った様子で胸を張る。

「だが…俺様は、そういった人間の愚かな一面を見ることによってある種の優越感に浸れることも事実…しかし…あの…芥川文乃は…っ」

綾野川は、表情を陰しくし、ギリッと歯ぎしりした。そして、テーブルを叩き、叫んだ。

「全然、その汚さが垣間見えないのだっ!!」

「…」

数秒の沈黙。

「…それは、だから、…良い子なんだろう？」

綾野川を見ながら糸倉が静かに確認する。

ぷっちーん。綾野川の中で何かが切れた。勢いよく糸倉の胸ぐらをつかむ。

「だああああああああああ!!『良い子』は『良い子』でもそれが『異常』なんだよ!!いいかあ!?!さっきも言った通り、人間っていうのは汚いものが少しでも混じってるんだよ!!そして、滲み出る!!」

「それがなんだ!あいつは、それを少しも見せやしねえ!!つつーことは、あいつが俺より上手か、百パーセント純粹な非人間だっ
てことだろうが!」

「ちょ…カレーこぼれる…それがどうしたの」

カレーに気を取られながら、糸倉が聞く。

「いいか?糸倉。俺様は俺より完璧に近いものが嫌いだ。まあ、その分俺様は向上心もあるから、俺様が嫌いなものはゼロに等しい。…が、あの芥川のやつの場合、するりと俺の斜め上を行きやがる。いくら、汚い面を引き出そうとしても、効きやしない。…もし、あいつが上手く隠しているだけなら、俺様もまだ、これから勝てる可能性は大いにある。しかし…、もし…あいつにそんなものがないとしたら…」

少し俯いた後、再び糸倉を見つめ、綾野川は言った。

「それは俺の敗北を意味する」

「…なんで」

普段あまり見ることはない真面目な表情の綾野川を見つめたまま、糸倉は聞いた。

綾野川は、目を細めて、言う。

「いいか、俺様の場合、どんなに完璧を目指し、純粋な良い子キアラを装ったとして九十九パーセントはいけるだろう。…だが、それを目標にしている時点で完全な『良い子』にはなれない。なぜならそれは『良い子を目指している人間』だからだ。だから俺は：『良い子』には絶対になれない：悲しいことにな」

彼女は、言いながら、眉間に皺をよせ、悔しそうな表情をする。

「だが、最初から汚いものなどなく、純粋な良い子という成分しかないのなら：！いや、善悪など、地域によって違うから『良い子』という表現は絶対的なものではないが、：そうだな。何かを排除しようと思わない自分本位の気持ちがこれっきしも無いのなら：『それ』は百パーセントになり得るっ：」

「その場合、俺は：勝てないんだ：っ」

言い終えると、綾野川は糸倉の服を掴んでいる手を離しはしなかったが、そのまま、うなだれた。

「：綾野川」

そんな、彼女が痛々しく見えたのか。彼が少し、慰めるように声をかける。そして、右手を彼女の頭へ：。

「大体だ」

突然、綾野川がバリトン並みの低い声で言った。

そして、勢いよく立ちあがり、服を掴んだままの手を首に移行させ、上に挙げ、糸倉を爪先立ちにした。

「大体、名前も気に入らねえっ！なんだ！『芥川』^{あくたがわ}って！『綾野川』^{あやのかわ}とかぶるじゃねえかつ！『文乃』^{ふみの}も下手すりゃ『アヤノ』って読めるしよおっ！

「楠村が体調悪そうだと！？ただ、面倒だったただけだろ！！あんなの年がら年中じゃねえか！アイツに崇高な教師的思想があるか！！

ヤブ医者ならぬヤブ教師だろうが！たんなるニコチン中毒だろうがっ！！なんだ！！疑わずして罰せずのアピールですか！！良い子アピールですか！！」

「あと、背低いとか！かわいらしいキャラとか！ハンデありすぎだろ！不公平だ！アイツ俺より今年告られた数多かったら完璧につぶしてやる！！」

意識が薄らいでいく中、天井を見上げたまま糸倉は思った。ああ……こいつは、ただ単に、自分を少しでも自分のキャラを脅かす存在が気に食わないだけなんだな……

そろそろ、糸倉が死になっただところで、綾野川が糸倉をベツドに投げ飛ばし、彼の命は一応救われた。

「昨日、ポルターが椅子と減少が起こったんだって？」

本日の天候は雨。朝、綾野川が席に着くとはるかが聞いてきた。教室には昨日の現象の残痕が痛々しく残されていた。

「うん、怖かったよー」

少し、おびえたような表情を造りながら彼女は平然とほざく。

「えー、その場にいたかったなあ。良いネタになったのに」

「おはよー」

「！」

そこへ、ある意味、事件の根源である芥川が登校してきた。

「おー、おはよー。文乃ちゃん」

はるかに続き、綾野川も笑顔で挨拶を返した。

「何の話してたの？」

「実はさ……って文乃ちゃん、鞆、なんか動いてるけど」

芥川の鞆の違和感に気づき、指を向けるはるか。

「え……あの……」

芥川は言いづらそうにモジモジしだした。

「……！」

その様子を見た綾野川の眼が光る。口元を：邪神のように緩める。

「どうしたの！？芥川さん！！すごい気になる！鞆見せてね！！」

「え？あつ、あの」

困惑している芥川なぞ何のその。相手の了解など得る気もない。有無を言わせずに、勢いよく身を乗り出し、鞆のファスナーに手をかける。

『さて。一体、どんな都合の悪い品物が入っているのかなあ？』
目を三日月のように歪ませ、そして、手を思いきり横に移動させた。

「…！」

芥川の鞆が開帳された次の瞬間、綾野川は思わず、目を見開いた。

「ミャー」

：黒猫であった。芥川の鞆の中には小さい黒猫が入っていた。

「…ね…こ？」

呆気にとられつつも綾野川は芥川をゆっくりと見上げた。

「え…とね」

バツの悪そうに芥川が口を開く。

「その…その子…登校中に捨てられているの見つけて、持ってきちゃだめなのは解かってたんだけど…今日雨で寒いし…」

「少しでも暖かいところにおいてあげたらって…」

ブツブツ

綾野川の身体に蕁麻疹の子が生まれる。

「え…と…」

「えー、可愛い！！いいじゃん！伊藤ちゃんに預かってもらおうよ。保険医っていつでも暇そうだし」

綾野川が言葉に詰まっていると、隣にいたはるかが、声高く言った。その声を聞きつけた他のクラスメイト達が集まってくる。

「どうしたん？」

「捨て猫、文乃ちゃんが保護してきたんだって。雨だから」

「うわあ、可愛いなあ、名前は？」

「黒猫だからクロ？」

「わー、ありきたり」

いつの間にか芥川たちの周りに大勢が集まり、盛り上がっている。

しかし、そんな様子を見ている綾野川の笑いだけは少々乾いていた。

「でもさあ、捨てられている猫を学校に運んできちゃうなんて」

輪の中で子猫を抱えている女子が小動物の頭を撫でながら、芥川に向き直って言う。

「やっぱり文乃って優しいよね！」

ピシッ

ほんわかとしたムードがクラスを包む中、ラップ音がしたことに気がついたのは窓際に避難している糸倉だけであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2396r/>

彼女は人を欺くことに快感を見出す

2011年10月9日23時40分発行